

5/26(火)、「ペンテコステ・チャペル」

聖書箇所:新約聖書、マタイによる福音書 4章1-11節

奨励題:「振り返る勇気」

現代を生きる私たちは、ある意味で「煽(あお)りの時代」を生きています。SNSの情報や周囲の空気、あるいは「他人に認められたい」という承認欲求にせき立てられ、私たちはじっくり考える前に、その場のノリや衝動的な感情に任せて次の行動へ飛びついてしまいがちです。

先週のチャペルでは、群馬ダルクの皆さんから薬物依存症からの回復についてのお話を聴きました。依存の本質とは、目の前の苦しみや孤独から逃れるために、一瞬で楽になれる安易な手段に飛びついてしまうことです。思想家マルクスは「宗教は民衆のアヘン(麻薬)である」と言いましたが、それは「宗教とは現実の苦しみから目を背けさせ、思考停止にさせる現実逃避の手段だ」という批判でした。

しかし、今日読んだ聖書は、キリスト教の信仰がそのような「現実逃避」や「思考停止の熱狂」とは真逆のものであることを示しています。今日の箇所は、イエス・キリストが公の活動である「公生涯(こうしょうがい)」を開始する直前の出来事です。過酷な荒れ野で四十日間の断食を終え、心身ともに極限状態にあったイエスに、悪魔が近づき誘惑します。悪魔はイエスを神殿の頂に立たせ、「神の子なら、下に飛び降りたらどうだ。神が天使たちに命じて守ってくださいるはずだ」と唆しました。「神への信頼をドラマチックな跳躍で証明してみせろ」という、巧妙な煽りです。現代の私たちも「自分の価値を証明してみせろ」という無言のプレッシャーに常に煽られています。

しかし、イエスはその煽りに乗らず、感情を昂らせることもなく、極めて静かにこう答えられました。「主を試してはならない」。イエスは、奇跡によって現実をコントロールしようとしたり、他者に自分を証明したりする必要を全く感じていませんでした。なぜなら、自分はすでに神に愛され、根本的に肯定されているという静かな確信の中に立っていたからです。

キリスト教の伝統が大切にしてきた礼拝や祈りの時間とは、感情の嵐や世間の煽りから一度離れ、頭を冷やすための空間です。真のキリスト教の霊性とは、思考停止のまま不確かなものへと飛び込むことではありません。感情に任せず、一歩立ち止まり、冷静に自分を振り返って「自らの立つべき土台」を確かめること、すなわち「冷静さを養うこと」にあります。宗教的な陶醉に身を委ねることではないのです。

短大生活は時に選択と焦りに満ちた「荒れ野」かもしれません。心が揺らぎ、何かに足をとられそうになった時、この「新島の森」の静けさの中で一歩立ち止まる勇気を持ってください。皆さんが、感情の波に吞まれず、自分がすでに尊い存在として愛されているという確かな土台の上に、誠実な一歩を踏み出していくことができますように、切に祈ります。